

リンゴ褐斑病

発生生態

病徴

成葉にははじめ1mm程度の紫褐色病斑を散生し、拡大・融合して不整形の褐色病斑となる。葉の健全部は黄変するが、病斑の周囲はしばらく緑色が残る。多発すると早期落葉する。(写真1、2) 果実では円形～長楕円形の凹んだ黒色病斑を生じる(写真3)。葉、果実とも病斑内に黒色蠅糞状の分生子堆を生じる。

本病の被害葉は早期落葉するため、樹勢の低下、果実の肥大不良、花芽や枝梢の充実不良などの被害を受ける。

伝染経路

被害落葉からの子のう胞子により一次伝染し、二次伝染は葉の病斑上に形成された分生子の雨媒伝染によって行われる。

発生を助長する条件

新梢基部の成葉に5月上旬頃から発生し、落葉期まで続く。果実には9月下旬頃から収穫期にかけて発生する。7～9月が低温多雨の時に多発する。いずれの品種でも発生するが、果実での被害は晩生種ほど多い。

防除のポイント

- ・罹病落葉を丁寧に集めて適切に処分する。
- ・本病は樹勢の衰えた木に発生しやすいため、樹勢の維持に努める。
- ・一次感染期の5月中旬から6月中旬と、二次感染期の7月中旬～下旬の防除が効果的である。8月から9月には多雨条件でまん延することがあるため、多発するおそれがある場合は薬剤を散布する。



写真1 葉の病斑



写真2 落葉被害の様子



写真3 果実での病斑

参考文献

・ひと目でわかる果樹の病虫害—第三卷—／社団法人 日本植物防疫協会

写真提供

・福島県農業総合センター果樹研究所

